

2021年11月

課題本 『ポプラの秋』

湯本香樹実/著 新潮文庫 1997年

「ポプラ荘の 魔法使い」

講師 吉川五百枝

「不死ならば 何も愛しく思えない 枚方 リリカ」

川柳欄では、そうだ、そうだ、と思える句によくであります。特に、例会でテキストになった本に関連することなら、こうして引かせてもらうことも多々あります。「死」にも、愛しさを産む働きがある。リリカさんが目をとめた働きを、私もこの小説で見ました。

誰もが経験しなければならない「死」。しかし、誰も自分の経験を語ったことのない「死」。

それなのに、「死」を文字で語ろうとする小説がたくさんあるのは、「死」には働きがあつて、生きている人間を動かすからではないかと思います。

体験できないことを表すときは、ファンタジーの手法を採られることが多いのですが、ファンタジーは多義です。私はここでは「異世界」ということばを想定しています。この世の衣を纏いながら、現世とは異なる世界を湧出させます。まるで現実のような「生者のファンタジー」。

「死」の周りのことを描くことしかできないという事実は、読者も書き手も織り込み済みです。ファンタジーとして書くしかないことなのに、作者は『夏の庭』でも今回でも、「死」を書こうとするのです。何が書きたいのだろうかと思いつつ本を開きます。

「愛しく思う」というのは、「死」の働きなのだ、と川柳は語ります。

主人公である千秋は、父親の死を経験しました。しかしそれは、〈父は、どこへ行ってしまったのか。〉という疑問形で受け止められています。6歳7歳という千秋の年齢では、「死」を抽象化するのは無理なのです。

この「死」は、千秋にとっても、千秋の母親にとっても、突発的な暴力的な働きであり、心を不安に陥れる冷酷な働きでした。ポプラ荘の間借り人として引っ越してきた母子は、うちのめされていました。

「死」がこういう働きをすることを、身近に何度味わってきたことか。

病が昂進し、もう転移の痛みが全身に回った人から送られてくるメールに、返信しなければならない苦しさ。私も「あなたは、ガンです。」といわれて死を覚悟したこともあります。だからといって、「薬がきかなくなったんよ」という人に「痛い躰を離れて、還るところがあるのよ、だいじょうぶ」とメールを返すには、どれほどの通信を重ねなければならないことか。何度も、力ない自分をまざまざとみせつけられました。その周りの人も、時間と共に衰えていく大切な人を眼前にしながら、波打つ心は嵐の中にいるような様子を示されます。しかし、ただ見ることしかできないのです。それが現実なのです。

ところで、小説を読んでいる人は、読んでいる時点では、生き残っている人だけです。

小説『ポプラの秋』も、生き残っている読者にむけて書かれています。読者が寄り添うのは、

生き残っている人。どうやら千秋の父は自死だったようですが、この父がどのような苦悩や絶望や諦念の中にあって自死を選んだか、そしてその結果をどのように思っているのかはもう知ることができません。書くとなれば、これもファンタジーとなってしまいましょう。

作者は、生き残っている読者に、生き残った者の現実を描きながら、その現実に向き合うかを、寄り添えるように丁寧に導いていきます。

ある夜、千秋にかかってきた風のような雑音だけの電話。間違い電話だったかもしれないが、千秋には、父からの電話だと信じられました。

〈私はもう父を見失うことはあるまいと安心することができた。〉

「父はどこへ行ってしまったのか」と幼い心に抱いた疑問に対して、「父はいる」という答えが返ってくる。もう、ファンタジーの手法だと思います。全編を貫いて登場する大家のおばあさん。「魔法使いのおばあさん」のイメージです。

〈あなたが大人になってもまだこの世にいるなんて、考えるだけでぞっとするよ。だけどまあ、ひとつがんばってみるかね〉。本当に、長生きしました。

その大家のおばあさんが病気になったとき、〈おとうさんに「おばあさんのびょうきがなおりますように」とおいのりしたら、おとうさんがでんわをくれたのだ、といったら、おばあさんは、「それは、よくおいをいわねば」といいました。〉死者からの電話をうけとったという幼子に対して、そのまま肯定して受け入れるおばあさん。これぞ魔法使いだなあとと思います。ファンタジーには、現実と異世界を繋ぐ魔法使いが必要なのです。

大家のおばあさんに、亡き父に手紙を書くという手立てを暗示されて、千秋は、せっせと手紙を書き始めます。おばあさんは、その手紙を預かって死後の世界に行ったとき配達してあげるのだと千秋に「秘密の役目」を話しました。

後年の千秋にも、〈私がああの不安な日々から抜け出すことができたのも、眠れない夜にかかってきた無言の電話を、父の電話だと信じることができたのも、手紙を書き続けたおかげでないと誰が言えよう〉とわかっているのです。

苦しいとき、それを自分から放して、つまり話して、時間を吸い込んで胸を広げることは、一つの方法だと色々な学者さんも認めています。

千秋も、〈手紙というのは何かに運ばれて行ってこそ、書いた者の心が解き放たれる。

母に、時間をあたえてくれてありがとう〉千秋自身も時間を与えてもらったのです。

ポプラ荘の魔法使いは、沢山の人に、魔法の粉を振りかけたようで、そのお葬式は多くの人集まりになりました。あのおばあさんは、どこに還ったのだろう。ドイツのブロッケン山か、竹取の物語のように東の海の蓬莱山か、お経の中の須弥山か。

ファンタジーは、沢山の人によって書き継がれています。

ポプラの木は、背が高くすっきりと立っているイメージの落葉樹です。作品のなかでもそれぞれの季節に応じて役割を果たしていました。

〈ポプラの木は、行き場がないなんてことはかんがえない。今いるところにいるだけだ。また仕事をしよう。〉時間に介護された千秋は、いずれ看護師の仕事に戻り、心にポプラを抱いて誰かの魔法使いになるのではないのでしょうか。

「死」があると知るからこそ、「愛しい」という思いがわく。人を慈しむ思いの源泉は、誰にも平等な「死」なのかなと思います。

読書会の余韻の中で「三行感想」

◆【 KT 】

6才で父を亡くした千秋と母親の葛藤。ポプラ荘の大家 おばあさんの不愛想な中にあるやさしさ。

「手紙は何か運ばれて行ってこそ書いた者の心がほんとに解き放たれるものだから」は印象的だった。

終盤に手紙で知る母の気持。父の死の真実。みんなの愛情を感じ千秋が生きる勇気を取りもどして良かった。

やさしさがあふれていて読みやすく温かさが残った。

いつも浅くしか読むことが出来ない私にとって「どれだけその本を深く読むかによって違ってくる」の言葉は痛かったが、いろいろな感じ方を聞くのが楽しい。

『ポプラの秋』を読んで

◆【 TK 】

児童書でファンタジーかと思って楽しみました。が、最後の 20 ページで一変でした。子供に自死とか身近な家族の死についてえがかれていたのです。

サンタクロースのように子供に信じさせて夢と希望を与えたおばあちゃんでした。サンタクロースは届けに来ますが、おばあちゃんが届けてあげるという設定です。最後に考えてみるとお母さんはわざと子供をおばあちゃんのことを知っていてこのアパートに引っ越したのでしょうか？

お父さんが亡くなりお父さんはどこに行ったの？と女の子は考えて不安になっています。マンホールにひょっこり落ちてしまうのではないかと忘れ物をしていないか？鍵をかけ忘れていないか？不安な毎日で友達とのコミュニケーションもうまくできないのでした。これって大人もそうですね。毎日怖いニュースを見聞きしてそう感じています。

ポプラとか青空を見て日常の憩いを感じおばあちゃんとおやつを食べ手紙を書きます。大人でも最近三行日記を書くことが流行っています。声を出して読むことも気持ちを整理する事ができるらしく、目標について書くのも良いらしいのです。

お母さんはお父さんと子供が性格がそっくりなので心配しています。そして再婚して大人になった子供とは一緒に生活をしていません。事情はあるだろうけど、家族になれない寂しさを一生感じるだろうと思います。

そして後書きですが、子供の前で何気なく出した言葉によって子供にずっと影響を与えてしまう事があるのを知り子供をつまづかせない言葉に気をつけたいと思いました。

おばあちゃんとイエス・キリストはお父さんの仲介者となる事ができました。最近家族が揃えない人が多い時代なので子どものたちはこの本を読んで力を得てほしいです。

◆【 R子 】

湯本さんの絵本『くまとやまねこ』が大好きな私。いきなり仲良しの小鳥の死に直面するくまですが、周りの動物たちはくまの心を分かち合うことはできないでいる。そんな時、一匹のやまねこがくまの心に優しく寄り添うことで心を解きほぐすことができた。やまねこもまた、大切な友達を亡くす悲しみを知っていたからですね。バイオリンとタンバリンの優しい音色が聞こえてきそうです。涙なしでは読めない絵本です。

同じく『ポプラの秋』も『くまとやまねこ』繋がりで、湯本さんの生と死の世界観を優しく繊細に表現されていてすぐに引き込まれていきました。

ちょうどその頃、友達(夫)が突然大病を患い生死をさまよいながら病と闘っていました。あまりに突然なことでどう自分が受け止めてよいかわかりませんでした。周囲の人は、「あまりのことで、奥さんに頑張ってもらえね。とは言えないし、言葉のかけようがないよね」「今は、見守るしかないよね」と言っていました。しかし、何か自分にできることは？と自問自答し、おばあちゃんがいるからお弁当作りをしてみようと思い立ち、時々彼女に届けながら、彼のことを聞き一喜一憂していました。

それでも、「このかわりには相手にとってはしんどくなるのだろうか？」と思う毎日でした。

読書会で、吉川先生から「なぜ命は大切なのか」それがきちんと整理できていれば、人はおせっかいではないとお言葉をいただきました。帰りの船の中で、その言葉を繰り返しながら、「たった一つしかないから」「その一つしかない命は現実には蘇らないから」「美味しいものを一緒に喜び合って食べられなくなるから」など、とても幼稚な発想での自分しかありませんでした。

その夜、彼の訃報が届きました。闘病し始めて21日しか経っていませんでした。やっぱり命は蘇らない。とても悲しくて悔しい思いでした。彼女のしんどさを考えたらいたたまれませんでした。

『ポプラの秋』に出てくるポプラ荘のおばあさん。とても不愛想だけど優しさを感じるおばあさん。おばあさん自身が悲しみを乗り越えて生きてきた人だからこそ相手にきちんと向き合っただけで寄り添える。私自身もこんなお年寄りになって死んでいきたいと思います。

彼の初七日、友達を誘ってお参りに行きました。彼は生前『仏説阿彌陀経』が好きだと言っていたそうです。みんなでたどたどしくお経を読み、夜遅くまで話し込みました。『ポプラの秋』に出会えて本当に良かったです。それに、読書会の皆さんが私を受け入れてくださったことを嬉しく思いました。

◆【 T 】

突然のお父さんの死。6歳だった千秋は父の死を理解できなかった。どこに行ってしまったのか、一体どういうことなのか、どうして急にいなくなってしまうのか…

父が亡くなったことによる大きな不安を感じると共に、亡くなったことで母が感じた悲しみ・後悔・戸惑いの感情を受け止め千秋は神経症になり日常生活を送ることができなくなる。

そんな千秋の気持ちを温かく見守り、ほぐし、寄り添ってくれたのが「ポプラ荘」の大家さんだった。大家のおばあさんは、子どもにねこなで声一つ出すわけじゃなく、自分から話しかけてくることはめったになかったが質問すれば答えてくれた。

おばあさんは、お父さんに手紙を届けてくれると言った。その言葉を聞き千秋はお父さんへ手紙を書き始めた。手紙を書き続けることで、千秋の心はだんだんと解放され、手紙の中でお父さんに語り掛けることもできるようになり、思い出してもつらくないほど立ち直っていった。

大家さんのたんすの引き出しの中には、千秋の手紙と共にたくさんの人の手紙が入っていたが、大家さん自身の手紙もたくさん入っていたのではないだろうか？人の苦しみがわかり手を差し伸べてきた大家さん自身も大きな苦しみを背負って生きてきたんだろうなと思われ。亡くなった先生への手紙、駆け落ちをした娘を嘆き心配し続けたであろう自分の両親への手紙、子供とともに残され辛い日々を送ったであろう先生の元妻への手紙…

大家さんの葬式で、お母さんの手紙を読み、千秋はお母さんや大家のおばあちゃんの愛情を感じた。お父さんが亡くなって母と娘の関係にすれ違いがあったが、やっと寄り添うことができたように思った。

◆【 N2 】

私もこのおばあさんにポプラ荘で会いたかった。

突然父親を亡くした七歳の千秋。彼女の不安定な精神状態を優しく距離を取って、からかうようなさりげない言葉を投げかけながら見守っているおばあさん。死者に手紙を書くことで死の怖さと寂しさを乗り越えていく人々。手紙を書くことによって日々薄皮を剥ぐように寂しさや悲しさが薄らいでいく。その手紙を自分があの世に行ったら配達してあげると秘密の約束をするおばあさん。本当に届くと真に受ける人がどれだけいるかは解らないが、手紙を書く時間、その手紙が届けられると信じる時間には、亡くなった人と繋がる事が出来るのは確かだ。読みながら自と涙がこぼれる所もあり千秋の再出発の決意と共に私にもポプラの葉を透かし爽やかな風が吹いてくるようだった。

◆【 K子 】

ポプラ荘に住む人達のお話です。シンボルのポプラの木が**デン**と立っています。シンボルになる木は別にポプラでなくてもよかったのでは…例えば常緑樹の松とか？いいえポプラでなくてはいけなかったのです。四季が必要でした。四季に合わせて、住人の心の機微が表現されています。「ポプラ」と言う木の「イメージ」ラテン語のポプラの「意味」作者はすべてに緻密な計算をしています。主人公の**千秋**と言う少女の6～7歳から始まり27歳の時まで彼女の心をいつも苦しみ(?)占めていた事の事実が最後に手紙によってわかるのです。登場人物のそれぞれが**負**と思われるものを持っているのです。自分の心の内を吐露する手紙をポプラ荘の大家のおばあさん(彼女はすごい傑物だと私は思いました)の家の古いタンスの抽出しに預けるのです。最終章でおばあさんが亡くなり盛大な葬儀(おばあさんに心を通わせていた人々の集まり)が行なわれ、例のタンスの抽出しが開けられるのです。まさにノスタルジーを感じます。手紙は母からのもので千秋が前向きに生きる道につながります。彼女が長年抱えていた事を解決する手立てになったのです。

全編から作者の根底に流れている「ていねいさ」死への「むきあい方」など胸に迫るものが

ありました。

◆【 F 】

今回遅れて参加したので、皆さんの感想を読めるのが楽しみです。前回は忙しくて感想文を書けなかったのが今軽く触れておこうと思っ、あれれ何を読んだのか思い出せません。半年前に読んだ本の形にできなかった(自分の中で完成した途端消えてしまった)感想文は断片的に思い出せるのにやれやれもう。おそらく「感想文を書くぞ!」「なんとか形にしよう」と思い続けて過ごした日々記憶を繋ぎ止められる何かがあって、最初から書くことを諦めていると、本を読んだ記憶すらも飛んでいってしまうようです。一つ勉強になりました。

今回の『ポプラの秋』も、読みおえて心の中に残って思い出せるシーンと頭の中に沈んだようで思い出せない(そういえばそんなシーンもあったなあという)シーンに分かれます。ポプラ荘に出会うまでの回想は全く抜け落ちていましたし、たくさんのページを占めていた(重要な?)はずのエピソード…教会、お通夜…も話に上がらないと思い出せなかったです。

ちゃんとして。話の筋を意識し作者の意図を考えながら、演出家にでもなったつもりで読めば幼少期の出来事が主人公の人格形成にどんな影響を及ぼしたのか等等、本の中にあるはずの色んな事に向き合えるような気もしますが。どうしても今の自分を覆っている「ええかげんさ」は実体験を出発点にして考える特徴を有しているので、なかなかうまくできません。実体験を出発点にして自分と物事を照らし合わせて思考するという選択は、自分の視野を意図的に狭めることで知らず知らずのうちに世間知らずになっていってしまいどこか損をしていると感じる時もよくあります。しかし一方で、自分が全ての出発点になるので相手に対してもハナから他人として、自分が生きてきた中で培った感情的な見方(世間的な常識)を切り離して接することができるので自分の心が強くなったような気もします。5月『鬼の橋』の読書会で、自分は鬼に近いと感じると話したのですが。今ある程度、言語化できた自分の精神性。自他を分けて善悪を超えて接し方(行動)を選択できるようになった自分は、非世間的で、鬼の立場にある気がします。

今回の作者は、ありそうな気がするファンタジーと現実のすれすれ、異世界を書ける作家だという話をされた時。(ファンタジーの部分が)現実にはありえないと断言された時、自分は久しぶりに自分の好きなものを否定されて傷ついた時の気持ちを思い出しました。

というのは、自分の中で作者は「自分が友人を亡くした後に感じ続けている死後の世界の存在を自分と同じように認知できる存在」のように感じていたからです。お葬式が終わった後、火葬場に連れ去られたことに怒りを覚えた自分は、できるだけ高く360度見渡せる場所へ行き5日前に召された友人を探しました。火葬場の煙は無煙化されていて目に映りやしないのですが物理現象として天へと立ち上っている煙を探して、ついに光る雲の中に彼を見つけたのです。あの時から自分は、空に友人を感じては地上では味わえない速度の風にまたがって世界中を旅していると思い心の中で語りかけます。そして、屋上駐車場からの帰りに妄想した死後の世界の旅の物語を反芻して、自分が旅先で見た光景に重ね合わせます。

◆【 MM 】

父親の死から始まる物語。主人公に起きた出来事とファンタジーがあわさって私の好きな物語だった。

死んでしまった父に手紙を届けてくれるというポプラ荘の大家であるおばあさん。最初のうちは怖くて近寄りがたかったのにいつのまにかおばあさんに惹かれていた。おばあさんもつかず離れずで見守ってくれたり助けてくれたりする。

おばあさんの死後わかったこともいろいろあって、父親の死についての真実や母親の想い。おばあさんに助けられ救われた人たちのつながり。おばあさんの死後にも世界がふわっと温かく広がっていく感じがとても好きだ。

今月は私は途中から参加したのだが、心に残った言葉は「自分から自分を自由にする」「なぜ命は大事ななの?」。自分の感情をコントロールし自由になることは頭ではわかっていたつもりだが、「自分から自由になる」…ふーむ。これは一朝一夕で理解したり身につけたりできることではなく、これからも時々思い出して温めて考えながら大切に扱うものになるだろう。「命はなぜ大事なのか」、これについての私の今の考えは、命は一つしかないから大事なのではないか。リセットができない。命のことに関しては読書会で話がとても広がったようで、それを通して聞けなかったのが残念だ。